令和５年度学校関係者評価委員会　議事録

【日　時】令和５年６月２５日（日）１０：００～１２：００
【会　場】こころ医療福祉専門学校　３階　講堂
【委　員】出席：大木田治夫，志岐浩二，松永正司，森﨑太一，川﨑和幸
藤原善行，小野格，髙田一樹，松下周平
舘川大輔，大石勝規，谷口幸太郎，永田俊晴，髙橋美如

（敬称略）

【議事録】

【総　評】大きな問題なし。

１　学校自己評価の説明（司会　副校長　小野　格）
学校自己評価報告書，学校自己評価結果に係る評価書の説明を行う。

２　令和４年度　学校自己評価結果に係る委員の評価書
特に問題なし・・・○
附帯意見あり・・・△

	点検項目	学校関係者評価
1	学校の目標・計画	○
2	教育理念・目標	○
3	学校運営	○
4	教育活動	○
5	学修成果	○
6	学生支援	○
7	教育環境	○
8	学生の受入れ募集	○
9	財務	○
１０	法令等の遵守	○
１１	社会貢献	○
１２	国際交流	○
１３	学校評価の総合的結果	○

３　令和４年度学校経営総括（副校長　小野格）

（１）授業の充実と国家試験合格率及び就職率の１００％達成

①中学・高校時代には，「学ぶ」→「わかる」の関わりで就職試験も大学入試も対応可能である。

しかし，育成機関である専門学校では，「学ぶ」→「わかる」→「できる」→「身に付く」という段階の学びが不可欠であることを教員も共有し，機会あるごとに学生にも周知し，意識化を図った。

②「授業は学校のいのちである」と考え，計画的に新任研修・職員研修や学科を定期的に開いて学生の実態把握や指導方策，授業の創意工夫に努め，教育の質の向上を図った。

③国家試験合格率では，理学療法科９０．９％，介護福祉科（日本人）１００％，スポーツ柔整科８４．６％，スポーツ鍼灸科９３．８％であった。

スポーツ柔整科の課題は大きいが，他学科のコロナ禍での頑張りは評価できる。

「国家試験年間指導計画」に基づいて計画的・組織的な指導を推進したこと，模擬試験ごと各学科会，学科長ヒヤリング，補講等による基礎学力向上対策，定期的な個別面談等が要因と考えられる。

就職率は，例年同様，全学科１００％である。

④低学力学生の指導目的意識が低い学生の指導の在り方や県外講師等のオンライン授業には課題が残った。

⑤今年度も新型コロナ感染拡大の中で，教員の事前指導や学生の自学自習姿勢等危機意識を持った取組みが，学生の意識化と学生成果や生活の好転に繋がったと評価している。「与えられる学び」から，自己の「意志ある学び」への脱皮のための指導は不可欠である。

（２）自立する職業人・社会人の育成

①本校は，「真の職業人」を育成することを目指した教育を推進してきた。

〇お客様第一の考え方ができる。

〇競争の中で生き抜く力を持つ。

〇「匠の教育」を推進する。

〇人に納得してもらえる専門知識･技術を持ち，人に尊敬してもらえる人徳を持つ。

②プロフェッショナルを目標とする学生達に，専門官の極意と哲学を学ばせ，人格形成を目指す人間教育と学びがい・働きがい・生きがい等社会人基礎力と職業的実践的育成のための教育を推進した。

③いろいろな各学科の計画はあったが，コロナ禍で，外部講師や同窓生の招聘，臨床実習等も十分機能したとは言い難い。今後も，学生にとっては，「本物に出会う教育」の機会提供は欠かせないと考えている。

（３）留学生教育の充実と基本的生活習慣の確立

①数年間，留学生教育の質の向上とＪＬＰＴ（日本語能力試験）４級以上全員合格の達成を目標に取り組んできた。長崎校の令和４年１２月４日実施の結果は次のとおりであった。

○ＪＬＰＴ結果－受験者数５０名

Ｎ３・・・１名中１名合格（合格率１００％）

Ｎ４・・・４９名中２８名合格（合格率５７．１％）

②世界的なコロナ禍で，留学生の入校はまとまった入校でなかっただけに，日本語科職員も限られた人数の中で創意工夫しながら成果に繋いでくれたと評価している。特に，習熟度別学級編成，学科教職員の連携，労を厭わない教員の姿勢等々特筆すべき取り組みがあった。

③寮生活・学校生活共に安定していた１年であった。日本語教職員の地道で行き届いた指導はもちろんであるが，２カ月に１回実施している「留学生実態把握アンケート」，「生活の記録」とその後の「個人面談」の効果は大きい。

オーバーワーク防止，学習支援，生活支援，経済支援等を通じての留学生と教職員の信頼関係の構築にも繋がっている。また，自治会や地域住民の理解もいただいており，地域行事やボランティア活動等の参加機会もいただいている。

④留学生教育の授業力と学級経営力アップ，学生のキャリア教育，留学生のニーズに応え得る進路先（大学，専門学校，就職）開拓等が喫緊の課題である。

（４）「個人自己評価」と「学校自己評価」による人材育成と学校活性化

①令和４年度から，学園挙げて従来からの「学校自己評価」の基礎となる教職員・学生アンケート（年２回）に加えて，個々の全教職員に本校独自の「個人自己評価」を年間で実施した。各教職員の取り組み目標を掲げているだけに，個々の教職員の仕事や事業等へのスキルアップや学校活性化等に繋がった。

②本年度の教職員・学生アンケートに見られた特徴としては，次のようなことが顕著であった。

（主な特徴）

○ 教職員・学生ともに，全体的に評価が向上している。

○ 教職員では，学校，教育環境に関する項目について向上幅が大きい。

○ 学生では，学納金の妥当性に関する評価項目について向上幅が大きい。

○ 学科別では，理学療法科が評価が低く，介護福祉科が評価が高い。

○ 学年別では，上級学年になるについて評価が低くなっていく傾向がある。

③コロナ禍の３年間は，教職員はアウトプットに終始する傾向が強く，落ち着いて研修に取り組む機会は大幅に減少しただけに，「個人自己評価」の実施や，新任教職員研修等は人材育成効果は大きく，また，有意義であった。

（５）学園体制として取り組む学生募集－１３０名以上の学生確保

①４学科で，定員１４０名に対して，令和５年３月１７日現在で１１９名である（その他入学辞退２名）。

今後，２名の職業訓練生を含めると１２１名と予想され，目標達成率は９３．１％となる予定である。

②学科毎に見ると，理学療法科３７名，介護福祉科４０名，スポーツ柔整科２３名，スポーツ鍼灸科２１名である。

③今年度もフェスタ，オープンキャンパス，ガイダンス，離島を含めた高校訪問等学校体制として全職員で取り組んだ。難しいコロナ禍であったが，入学予定者１２１名中，高校生は７１名で昨年度に比べて１３名増加したことは成果である。

④今年度の退学者・除籍者は１５名であった。減少傾向にはあるものの，今後は，「入学してくれた学生は，必ず卒業させる」という信念をもって指導にあたり，教育の責任を果たしていかなければならないという思いを強くしている。